



図像を資料として読む

石井 和帆 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)

筆者は近代(明治・大正期)に描かれた絵画を中心に、民俗学の立場からどのようにそれらを資料として読み解くかを大きなテーマとして研究を続けてきた。この研究エッセイを執筆するのを良い機会に、図像を資料として捉えることについて自身の考えを述べよう。

写真の技術が乏しかった時代の生活文化を理解するためには「絵」、「図」が極めて最適である。文字として記録され、残されてきた史料のみでは、当時の生活文化をイメージすることに限界がある。我々は何かをイメージする際に、自身が過去に知覚した経験や知識を呼び起こして想像をするため、文字(史料)のみでは未知の経験を「像」としてイメージすることはできない。そのため、文字(史料)を補うかたちで、図像を資料として用いることは極めて有効であろう。

だが一方で、主体(描き手)が対象(民俗事象)を視覚で捉え、支持体(版画、絵巻、日記など)に出力する過程の中で、対象の図像(イメージ)と実体には異なった差が生まれる。そこに、図像を資料として扱う際に批判的に読み解く必要のあるフィクション(虚構)が生じやすいと考えられる。この図像資料の一つの性質である客観性の乏しさが図像の資料化を困難にしている要因の一つといえるだろう。

では、図像の客観性の乏しさを克服するためにどのように試みればよいのか。筆者が継続的に資料化に取り組んでいる『風俗画報』を例にしてみよう。『風俗画報』とは、明治・大正期に東陽堂から発行された画報雑誌である。明治22年(1889)2月から大正5年(1916)3月に最終号を出すまで、27年間にわたって通巻478号を数え、増刊号を合わせて518冊ほど刊行された。絵画や写真を重視し、主要な記事には石版画による挿絵や写真版を併せて収録するなど、わが国最初のグラフ雑誌といえる。

その内容は極めて多岐に渡り、江戸・明治・大正の世相や風俗を網羅的に収録するだけでなく、特集号では戦争や災害などを報道する役割も含んでいた。中には、全国各地の年中行事や祭礼、時には人々の日常風景などの民俗的事象を克明に描いた挿絵も多数収録されている。例えば、東京日本橋の新年における人々の雑踏を描いた「日本橋新年の景況(図1)」、千葉県や長野県における正月行事を描いた「上総のジャンガリコの図(図2)」や「信濃国三九郎焼(図3)」などが挙げられる。同誌

は当時の風俗を研究する上で、歴史民俗資料として見逃すことができない文献である。

ただ、『風俗画報』に収録された記事と挿絵は約11000図と膨大で相対化することが極めて難しい上に、同誌の背景についても十分に明らかになっていない。これらの挿絵を読み解く上で、画面に描かれた可視の事物を分析するだけでなく、その背景に潜んだ不可視な要素を読み解くことが重要となる。表面的な要素を読み解くだけでは、同誌の資料性や客観性を確保することは困難であるため、それを取り巻く諸要素をまとめてみよう。

同誌は、人々の生活文化である風俗に比重を置き、全国各地の風俗を網羅収集し、後世の研究に資することを第一の目的として編集された雑誌であることは創刊号に明記されている。その収集方法は郷土史家や好事家たちから投書を募ることで、全国各地の風俗を網羅的に収集していた。この投書システムによって、全国の民俗事象が集積され、編集会議ではその中から精査し、あるいはどこの地域の何の風俗の記事として紹介すべきか検討される。

さらに、主要な記事に対しては、編集員が絵師に依頼し、方針に沿った挿絵を描いてもらう。ここで注目したいのは、描かれた挿絵の形式である。絵師たちは東陽堂の絵画部門に属すとともに、多くは美術界で活動するアマチュア絵師であったが、生計を立てるために同誌の挿絵を請け負っていたのである。彼らは、古人の粉本を基に伝統的な画題を模倣して描く形式をとる美術的な絵画と、同誌に掲載する現今の世態をありのままに写し取る記録画とそれぞれ描き分けていた。それは、風俗を記録するという編集の意向に沿ったものであった。

その挿絵に描く風俗の取材は、現地に赴いて実見した上でスケッチを行う。地方などの遠方の風俗を取材する場合は、編集員が絵師に同行して取材を行うことがほとんどである。編集員が同行することで、絵師が描く内容についても編集員の意向が反映しやすかったと考えられる。

ただ、中には実見せずに、想像によって描かれる挿絵もある。それは、日清・日露戦争の戦況を記録した戦争画や災害や事件を描いた時局絵などが挙げられる。この場合は伝聞や他の資料を参考に描くほかないが、基本的には絵師が直接実見した風俗を記録していることから、その意味では資料的価値は高いといえるだろう。

また、一方で、同誌の主要な編集者であった野口勝一や山下重民が記す巻頭論説などの記述から特集号では国家規模の事件や出来事を報道しながら、国民に国家形成のためのイメージを浸透させる役割を果たす一方で、通常号では全国から送られてくる好事家たちによる投書を「美風良俗」なる民間の風俗を取捨選択して掲載することで国民の内面を形成する意図を含んだ側面があったことも指摘できる。中には「悪習陋習」を「美風良俗」なる風俗へと再編成し、場合によっては古来より民間で行われていた風俗を再発見し、国家の行事へと統合を図ろうとする思惑が見え隠れする。つまり、「風俗」が国民を形成するものであるという認識を編集員たちがもっていたと考えられる。

だが、このように政治的な側面が見え隠れする同誌だが、編集員たちの思惑に沿って選択され、収録された記事や挿絵は、上述したように好事家や絵師などの様々な視点が混在することによって、編集員たちの思惑から免れることができたのである。

図像の性質の一つは先に述べたように、主体（描き手）が対象（民俗事象）を視覚で捉え、支持体（版画、絵巻、日記など）に出力する過程の中で、対象の図像（イメージ）と実体には異なった差が生まれることである。『風俗画報』に収録された挿絵の場合は、これらに加えて主体が絵師のみならず、記事の投稿者と編集員の少なくとも三つの視点が複雑に交差している。そのため、複雑に絡み合った視点によって制作された挿絵を読み解くことは困難を極め、これまで同誌に対する研究が盛んに行われてこなかった大きな要因といえるだろう。

このように、特定の図像を資料化するためには、図像そのものを一面的に分析するのではなく、周辺の諸要素を多面的に明らかにしないことには、図像の客観性を確保することは難しいだろう。『風俗画報』に収録された図像は膨大で、さらには周辺の諸要素は複雑であり、一朝一夕では相対化することは叶わないが、同誌を取り巻く諸要素の一部分、編集方針や取材方法、挿絵の形式などは先に述べたように明らかになりつつある。地道に一つ一つを解明するように試み、同誌を資料化する正当性や妥当性、真実性など検討することで、ようやく同誌に収録された膨大な図像を資料としてみるようになる。

私自身も引き続き、地道に同誌を様々な角度から研究を試みる予定であるが、より多くの方々が『風俗画報』に興味関心を寄せ、積極的に活用されることを願うばかりである。



図1



図2



図3